

Fate/Different

倉敷 紡

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロード・エルメロイⅡ世が冬木の聖杯を解体した数年後の物語。

冬木の聖杯を模倣し開催された「亜種聖杯戦争」や「偽りの聖杯戦争」とは全く別の聖杯。

その聖杯を巡り、「異種聖杯戦争」が始まる――！

※この作品にはオリジナルキャラ、オリジナルサーヴァントが多数出てきます。プロット段階でGrand Orderに出てくるサーヴァントは出さないようにしていますが、もし出てきてしまった場合はオルタナティブ扱いでよろしく願います。

お気に入り登録、感想、評価などよろしく願います。

# 目次

intro	1
Prologue	
序章・槍兵	3
序章・暗殺者	5
序章・剣士	7
序章・魔術師	9
序章・???	12
真・序章	15
act1	
1. インランドエリア	18
2. 聖杯戦争	21
2-2. 聖杯戦争	25
3. 同盟	30
4. 開戦	33
番外編・Status	36

万物の願いをかなえる「聖杯」を奪い合い争う、聖杯戦争——。

聖杯とは、あらゆる願いを叶える願望器である。

その聖杯を求める7人の魔術師（マスター）と過去の英雄を7騎のサーヴァント（セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー）として召喚し、最後の1騎になるまで覇権を競い、奪い合う。

そして、その勝者は全ての願望を叶える権利が与えられる。

始まりはアインツベルンによって聖杯が宿る器、英霊召喚の基盤には第三法の一部が提供され、遠坂によって土地・冬木市の提供、世界に孔あなをうがつ秘術、サーヴァントを象かたどるシステムを、マキリ（間桐）によってサーヴァントというシステムの考案、素材安定のための呪い、令呪を考案し編み出された。聖杯戦争のシステムを作り上げ、成り立ちから関わっているこの三家を御三家と呼ぶ。さらにこの御三家は聖杯戦争においてもいくつかの特権を所有する。

そして過去に五回、日本・冬木にて聖杯戦争が行われた。

その聖杯も時計塔の現代魔術科ノーリッツの君主ロードであるロード・エルメロイⅡ世が大聖杯を遠坂家の当主と解体し、冬木の聖杯戦争そのものが完全に無くなった。その解体時、大聖杯の復興を画策していた魔術協会の一部と対立、聖杯戦争に匹敵する大騒動が引き起こるが、それは私が語ることはないだろう——。

しかし、未だに聖杯戦争を使い根源へと至らんとする魔術師はいるもので冬木の第五次聖杯戦争から数年後、第三次聖杯戦争参加者であるアサシンのマスターの一族が冬木の聖杯戦争を模倣し、アメリカ・スノーフィールドで「偽りの聖杯戦争」なるものが開催されたのも知っている者も諸君らの中にはいるのではないだろうか。

私が今語るはその『偽りの聖杯戦争』でも、並行世界の2032年の霊子虚構世界「S.E. R.A. P.H（セラフ）」と呼ばれる仮想現実世

界で行われるであろう『月の聖杯戦争』でもなく、

並行世界の第三次聖杯戦争後、聖杯戦争が世界的に広まり世界各地で開催されることになった『亜種聖杯戦争』でも、

その世界のルーマニアのトゥリファスにて7騎VS7騎+裁定者ルーラーの計15騎のサーヴァントが召喚され、「黒」と「赤」の陣営に分かれて戦われた『聖杯大戦』でもない。

ロード・エルメロイⅡ世が第六次聖杯戦争の開催を防いだ時より数年後に起きた全く種類の違う異なる聖杯戦争、

名付けるならば、そうだな――。

『異種聖杯戦争』そう名づけてみても良いかもしれない。

## Prologue

### 序章・槍兵

私は見つけた。私が見つけた。私の見つけた場所。簡易的魔術工房。

はるばる日本からやって来た甲斐があつた。この為にお爺様の遺産を持つてきた。

私は確信していた。ここなら大丈夫だ。これなら大丈夫だ。彼なら大丈夫だ。

私は準備する。触媒を準備する。魔方陣を準備する。

水銀で描く。消去の中に退去、退去の陣を四つ刻んで召喚の陣で囲む。触媒となる聖遺物を祭壇に置く。

そうして完璧で最高の準備の元、未熟者の私は唱えた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

祖には我が大師 ■■■■■——

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至

る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

魔方阵は眩く光り、辺りは煙に包まれる。目が開けられるほどに光は落ち着き、煙が晴れる。身の丈は2m近くあろう大柄の人影が私の目の前に現れ

「サーヴァント、ランサー。お主が我が主か<sup>あるじ</sup>」

そう名乗った。ランサーと名乗るその大男は甲冑に身を包み、私の顔を見つめた。

その顔は険しく、武張り、柔らかさというものがなかったが、私にはとても美しく映った。

美しかったその顔を見るのが辛くなり、顔を逸らす。

が、その顔に引き込まれ、再び彼の顔を見る。見てしまう。

「……いや、何も言うまい。」

して、<sup>マスター</sup>主よ。己が聖杯にかける望みはなんだ？」

ランサーが聞いてくるが何も答えない。応えない。応えられない。

しかし、ランサーの目はじっと見つめてくる。

やめろ。見るな。見てくるな。見つめるな。ランサーの瞳の中には私が写っている。

「ほう、よいだろう……。で、あるならば!!我が槍は主<sup>マスター</sup>の願いを叶えるため振るうのみ!!」

自らの身長は何倍もあろう長槍を振り構え、私に忠義を誓う。私は自分の右手の甲に刻みつけられた「令呪」をさする。

「……ランサー。」

あなたのその槍を誰のためでもなく……この私、<sup>みまさかことね</sup>美作琴音のために……振るいなさい……!」

ランサーの言葉を借り私は彼に頼み、命じ、願う。彼はニツと笑うと私に顔を近づけ

「当たり前であろう!そなたは我<sup>マスター</sup>の主なのだから!!」

そう言い放った。顔が赤くなる。いや、なるものか。耐える。歯を食いしばり背けたくなる。

よし。<sup>ランサー</sup>彼がそう言ったから、私は決める。勝つと決める。負けな  
いと決める。聖杯を手にする<sup>ランサー</sup>と決めた。・

## 序章・暗殺者

妾を召喚したの者は男だった。

随分と貧弱そうなボサボサの髪に苦学生のような見窄みすぼらしい男。

そして倭人……日本人の男だった。妾は諦めた。此度の聖杯戦争は負けたな、と。

顔には出さなかったがそう思った。そう確信してしまった。

「あなたが……」

男は妾の姿を見てそう呟いた。

大方、妾の旦那が召喚されると思うたのだろう……。なんとも滑稽よな。

仕方なからう、この触媒じゃ……。妾が召喚される可能性かとあろうて。

さてと、気が進まぬが妾も言うかの。

「サーヴァント、アサシン。召喚に応じて参上した。よろしく頼むぞ？男よ」

「俺があなたのマスターだ」

この男の表情からして、声からして諦めている。お互いに此度の聖杯戦争を諦めている。

それもまた、おもしろき戦いになりそうよ。

「あなたの真名は……いや、聞かなくてもいいか。

あなたには俺が諦めているように見えるかもしれないが、誰であろうと俺のサーヴァントだ。

必ずこの聖杯戦争を勝ち抜き、共に聖杯を手に入れよう」

驚いた。此奴、妾に自分がどう見られているか理解しているとみた。ならば良いだろう。

「マスターがそう言うのであれば、妾も全力で聖杯を獲りに行こう。

妾はマスターのサーヴァントなのだからな」

男は……いや、〃妾のマスター〃は満足そうに微笑んだ。

なるほどマスターはこのように笑うのか。

「アサシン、あなたの聖杯にかける願いはなんなのだ？」



「妾が願うは、夫に再び相見あいまえることよ」

「自分を死に追いやった夫でも？」

「あれは仕方なかったこと。マスターも歳をとり、愛する者を見つければ理解できような」

ふふふ、と笑う妾にマスターは小恥ずかしそうに頭をかく。

「初めての倭国で観光——と行きたいところじゃが、マスター。

妾らも向かうとしようかの決戦の舞台へ」

「ここは俺の工房だ。外の景色が見えないのにわかるものなのか？」

「匂いじゃよ。妾も国の匂いくらいはわかるといふもの。お主もまだまだよな。ふふふ」

マスターは妾を見つめて……いや、これは睨んでおろうな。——どちらでも妾には関係のないことじゃが——妾に揶揄されてマスターは睨んでおる。

妾の気持ちを倭人の若者風に言うとマジウケル。なんと……あれ？言わない？

そんなマスターを気にせず、妾は実体のまま外に出る。夜だということに不夜城のような明るさ。いくら聖杯から知識を与えられようとも一見は百聞にしかずというもの。

まさに眠らぬ街、と言ったところかの。

妾は此度に聖杯戦争に心踊らせ、空港とやらに向かう。

「マスター！はようせいー！」・

## 序章・剣士

僕は自分に問う。聖杯戦争において、最優のサーヴァントと呼ばれているクラスは？

僕は自分に答える。剣士のクラス、セイバー。

再び自分に問う。僕が召喚したサーヴァントは？

再び自分に答える。セイバー。

ならば、セイバーを引き当てたマスターは必ず勝利できるのか？

否。セイバーが最優のサーヴァントと言われている所以は“他のクラスよりも優っている”“セイバーを呼べれば楽勝”という意味ではなく、ステータスのバランスが取れているからである。

やはり、聖杯戦争を勝ち抜くにはマスターの采配が重要となってくるわけである。

「セイバー……この聖杯戦争はもらったも当然だね！」

僕は自信を持って目の前の男に言った。

「そうであろうか？私がいいた時代、私が戦った敵はみな強かった。

そして戦とは、時の運。たくさんの兵、いや味方たちを失った……。

それでも私は抵抗を続けた。私は自分の国を愛していたから。

しかし、私は負けた。負けてしまったのだよ。少年……いや、マスターよ。

この世に絶対などという言葉は存在しないのだ。よく、肝に命じておくように」

「は……い……」

僕は、説教垂れるセイバーに嫌悪感を抱き、適当に返事をした。

なんで僕が使い魔サーヴァントごときに怒られなければならないんだ。

僕じゃなくお前がマスターか？

そりゃあスコットランドの英雄様なんだから素晴らしいのはわかってるけど？

だからと言って僕に意見するのはどうかと思うな!!

「して、マスターよ」

「なんだいセイバー」

「なぜ我らは自転車に乗っているのです?」

「その問いはものすごく簡単なことだよ、セイバー」

僕は車を運転できない。だからこうして、君を実体化させて二人乗り自転車で決戦地まで向かっているんだ」

体力、魔力共に同時に吸われていく。

僕の疲労度はマックスに達していた。どうして僕がこんな目に合わなければならぬんだ。

「ここまで来ておいて申し訳ありませんが、マスター。

私の騎乗スキルはB。現代の乗り物であれば問題はありません」

.....

.....

ぎっけんよな

!!!!!!

え?え?なに?もしかしてだけど僕のやってきたことっていわゆる、無駄って奴じゃないの?

「もしかしてだけどき、僕は漕がなくても君が連れてってくれるってことかい?」

我がサーヴァントくん」

「そういうことになりますね」

最初から言えよ、セイバー……

僕は彼に呆れながらも心の中で決意を固める。

父さんは僕を認めようとしてくれない。僕が次期当主だというのに。

だから僕は父さんに認めてもらう。

僕はあなたが思っている以上に優秀なんだと、そう認めさせてやるんだ。

そのために父さんが参加しようとしていたこの聖杯戦争で証明するんだ……!

## 序章・魔術師

彼女はよくいる一介の時計塔所属の魔術師だった。いや、*「*だった*」*はおかしい。現状そうなのだから時計塔所属の魔術師だ。

ほんの半年前に父親から魔術刻印を引き継いだばかりで7代目当主に成り立てだった。

そんな彼女は時計塔の降霊科の講義を受けるために教室に向かっていた。

時計塔の生徒と言っても様々だ。中には授業を受けたくない生徒もいるのだ。

そういった生徒らは口々にめんどくさいだの、受けたくないだのと廊下で話す。

*「*くだらない。受けたくなければ、受けなければいいのよ。その間に私はもつと上に行く*」*

そう呟くと先ほどよりも歩くスピードを速め教室に向かった。

真面目に講義を受ける彼女の後ろで不真面目な女生徒二人。彼女らがコソコソと会話しているのが耳に入る。無視しようとするが耳元で飛ぶ羽虫のように彼女の耳に問答無用で入ってくる。

*「*聞いた？ 聖杯戦争の噂*」*

*「*なによ、それ*」*

*「*どうも近々開催されるみたいなのよ*」*

*「*あれ？ でも聖杯って近代魔術科のロードの手によって破壊されたんじゃないや……*」*

*「*さあ？ 私は知らないわよ。ただ聞いたただけだもの。噂よ、噂*」*

*「*ふーん……。ま、私たちには関係ないわよ*」*

*「*でもさ、少し面白そうじゃない？*」*

そこで講師が睨みつけたので、残念ながら二人の会話は終了した。それきり聖杯戦争の話題は二人から出ることはなかった。

講義終了後、彼女は図書館で聖杯戦争について調べ始めた。

*「*なるほど……。ね。面白そうじゃない*」*

彼女はその噂の出所や開催場所を自分ができうる限り調べた。

いつものほんの興味だけだったのが、好奇心に代わり、しだいに参加したいという欲求が変わっていった。

しかし、彼女には問題があった。サーヴァントを召喚するための触媒となる聖遺物だ。

彼女は自分が出来るありとあらゆる方法を模索し、どのような手段も選ばなかった。

その結果だ。彼女は聖遺物を手に入れることに成功し、噂の聖杯戦争の開催地に向かった。

そこからは簡単だった。彼女は書物で読んだ暗記した方法でサーヴァントの召喚を試みた。

その結果……

「サーヴァント、キャスター……あれ？違う？私は誰？」

ここまですが僕のマスターが僕を召喚するに至った経緯の物語。

そしてここからがサーヴァントである僕と彼女の物語なわけだ。

【序章・魔術師】 【序章・復讐者】

「は？あんだ、誰よ」

彼女が用意した触媒は、かの有名な劇作家ウィリアム・シェイクスピアのハムレットの手書き原稿のよくわからない場面一枚だった。それで召喚されるサーヴァントはもちろんウィリアム・シェイクスピアだ。

いや、そのはずだった。ただ、彼女の目の前に現れた僕はシェイクスピアではなく、王族だった。

「いやはや、なるほどなるほど。理解した」

「私のはあなたのマスターよ。あなたのクラスと真名を教えなさい」

「これは、これはマスター。失礼致しました。」

クラスは復讐者——アベンジャー。

どうやらマスターが用意したこの聖遺物はかの憎きシェイクスピアのハムレットの失われし手書きの原稿のよう……。

そして私はハムレットのモデルとなったデンマーク国王王子アム

レート。

此度の聖杯戦争の聖杯は弱小サーヴァントであるシェイクスピアを召喚するならばイレギュラーなクラス、復讐者のアベンジャーを用意したのでしような。

そして、この聖遺物とサーヴァントとマスターの相性を鑑みた結果、*「僕」*が召喚されたのでしよう！」

「どうしたのです？ そのような鳩が豆鉄砲を数百発くらったような顔をして

彼女は生唾を飲み、一瞬思考を張り巡らせるような仕草を見せると「つまり聖杯は私が召喚しようとしたシェイクスピアは弱小だから、そいつを召喚するくらいならば、触媒に使ったこいつからあんたを選んだってわけね」

「全く同じことを先ほど説明致しました」

「んなこといいのよ!! 要は何？ あんた強いのか？」

強いか弱いかで聞かれると僕自身も困るところはある。だが、彼女が希望する答えを口に出すならば

「シェイクスピアよりは強いです」

「はあ……もうあんたでいいわ。というよりあんたでしか無理か……。」

よろしく、アベンジャー」

仕方なしに彼女は右手を差し出す。少なくとも僕が知るあのアベンジャーよりは強いはず。

……多分。……きつと。そうだよね……。

「我が剣はあなたの為に振るいましょう、マスター」

そう言つて僕は差し出された彼女の手をぎゅつと握り返す。異常な聖杯戦争。異常なクラス。

異常なサーヴァント。異常な僕だからこそ正常であろうとする。

異常の中の正常、それもまた異常なのだから。・

## 序章・???

私、ギネヴィア・セレナはセレナ家第5代当主の魔術師だ。

5代続いたとなれば、それなりの魔術師の家系だと思われるかもしれない。

が、しかしだ。私のご先祖であるアメンバ・セレナが魔術を習得から無駄に5代続いたと言っても過言ではない。

そもそも私はこの「ギネヴィア」という名前自体好きではない。なぜ、英国の「不貞の姫」と同じ名を与えられなければならないのか。

今は亡き祖母がつけてくれたそうだが、謎だ。祖母は英国の生まれでもなければ、私の血族に英国出身の者など一人もいない。少なくとも母方、父方双方5代前まではいない。

さて、私の身の上話などは置いといて、話は変わるが教えて欲しい。私の目の前に立つ、この大男は誰なのだ。

いや、この場にいるのは私一人なのだから私以外にこの男を視認できる者はいないのだけれども。しかしこの男、年老いた風貌でありながら老いを感じさせず、威厳もある。そのような老人に私は生まれてこのかた出会ったこともなければ、見たこともない。

困惑している私をよそに男は口を開く。

「魔術師か？」

「は？」

「其方は魔術師か、そう問いておる」

この男、何言ってるんだ？

魔術協会総本部であるロンドン・時計塔から遠く離れたこの地で根源なんて目指す手段も方法もない私たちの家系は魔術を隠匿するのではなく、それを利用し、金を稼いできた。そう……私たちセレナ家は魔術師なんて者ではなく、魔術使い。

魔術師たちから忌み嫌われる生業の者なのだ。魔術師ではなく、魔術使いとして5代続いたわけだ。これが先ほど私が無駄に5代続いていると言った理由だ。

「娘、聞いておるのだろう、娘」

娘を連呼するな、男。私は魔術師ではなく魔術使いだ、男。

しかしまあ、5代も続けば魔術回路の数もそれなりな物になるものでメインは30やそこら。ついでにサブも20と割とある方。だからこの大男には言つてやった。見栄と自虐を込めて。

「ええ、そうよ？アタシは魔術師よ」

「ならば、ワシと契約せよ」

「は？」

「魔術師ならば、知っておるだろう？」

ワシはサーヴァント、ルーラー。ペトロなり」

サーヴァント……。聞いたことがある。確か聖杯戦争だっけ？そこに呼ばれる使い魔のようなものらしいけど……。

「なんでアタシがあんた……。サーヴァント？と契約しなきゃならないのよ」

「ワシは聖杯に呼ばれ顕現した。……。したのだが、どうやら聖杯からの魔力供給がない。」

魔力供給がなければ、ワシは消えるのみ。それはよろしくない」

あれ？サーヴァントって聖杯に呼ばれて、マスターが召喚して、そのマスターに魔力供給受けるんじゃない？私もよく知らないけどさ。

「娘、はよせい。……。娘」

まずいな。この男、私と契約するつもりだ。でも聖杯戦争に参加すればセレナ家も魔術使いとして、名が広がれば仕事も増えるだろう。それに勝利すればなんでも願いが叶うらしい？

魔術使いから魔術師になることだって可能かもしれない。そうすれば、私は魔術師が目指す『根源』——『根源の渦』。「」とも呼ばれていたかしら？——に至ることができ……。そこに至ればどうなるのかよくわからないけど。

ちよつと待つて、いいことづくしじゃない！ま、いいんじゃない！？契約でもなんでもしてやるわよ。この男の気が変わらぬうちにさっさと契約とやらをしてしましましょう。



「オーケー。いいわ、契約しましょう」

大男は……いや、私のサーヴァントは私に契約の詠唱呪文を教える  
と満足に笑った。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は剣に。」

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うならば——

我に従え、ならばその命運、汝が「杖」に預けよう！」

「ルーラーの名に懸け誓いを受けよう……」

其方を我が主と認めよう、ギネヴィア・セレナ……！」

タンスにぶつけたような痛みとともに私の右手に赤い痣のような  
ものが浮かび上がる。これが令呪か……。

なっちゃたかー。私もついにマスターになっちゃったかー。仕方

ないなー、聖杯戦争参加しちゃうか。そして勝利もぎ取っちゃう!?

なんて能天気なことを考えていた数時間後、私はまともな普通の聖  
杯戦争ではなく、異常な聖杯戦争に参加してしまったことを理解し、

後悔するのは語るまでもないだろう……。

「本当に最悪なんだけど……?!?!?!」

なんの説明もなしに契約させやがって!!どこの英霊だよ!!!あんの  
クソオヤジ!!!」

私は寒風そよぐ丘で高く広がる空に思い切り叫んでやった。

「ワシはルーラー、ペトロ」

「うっさい!黙れ!!」

はあ……。アタス……。私の聖杯戦争どうなっちゃうんだろう。・

## 真・序章

暗闇の寒空の下、カソックに身を包んだ女がこの地でも見られることが珍しい極光<sup>オーロラ</sup>を見上げ笑みを浮かべていた。そこへ黒いマントに身を包んだ2m近くはあろう長身の人物が近づいてきた。

「7騎のサーヴァントの召喚が確認されたようだ」

「そう、ありがとう。あなたは教会の中に戻っていなさい。外は冷えるわ」

「それを言うならばリン。キミもだ」

「心配ありがと。私はいいわ。すぐに戻るから」

軽くやりとりを交わすと長身——こちらは男なのか女なのか不明——の人物は教会へと入っていき、カソックを着たリンと呼ばれた女は極光に祈りを捧げた。

「直に始まります。もうしばしお待ちください……」

そう呟き暫く祈りを続けたのち、人物が暖かいスूपを用意して待っている教会の中へと入って行った。これから始まる聖杯戦争に向け準備を進めるために。

外ではそう、極光<sup>オーロラ</sup>が戦士たちが剣や長槍で戦っているかのような光景が広がっていた。その様子を見上げていた一匹のツンドラオオカミの遠吠えが広い大地にこだました。



聖杯戦争の開催地、その極寒の地へスキーウェアよりも分厚く重量があり、首元まで締め付けんとするコートを着込んだ二人組の男女のペアが航空に降り立つ。

「のう、マスター」

「どうした？アサシン」

「何故、妾がこのような無様な格好をせねばならぬのだ？」

「別に脱いでも構わないが、寒いどころの話じゃないぞ」

「マスター！ここはどこなのだ！」

聖杯戦争の開催地、デンマーク領世界最大の島・グリーンランド。そこに踏み入れたのが確認されたのはアシンとそのマスターだった。

「しばらく我慢してくれ」

アシンは呆れた顔でマスターを見た。それを気にせず、男は前もって金で雇っていた車に乗り込むと、日本語でアシンに早く乗るよう急かした。

「マスター、お主は妾を誰だと思っておる」

そういう態度をとるマスターにアシンは不満を口にしつつ車へ乗り込むのを確認すると彼は練習した下手くそなデンマーク語で目的地を頼むと運転手は進めた。

「して、マスターよ。妾はまだ開催地の詳細を聞いておらぬが？」

「ああ、すまない。ここ西グリーンランド、カングルルススアーク市よりも東。雪原のみが広がる内陸何もない中央グリーンランド。開催者はそこをインランドエリアと名付けた」

「内陸部……そのままではないか」

彼は呆れを口にするアシンを横目に飛行機での長旅、時差等で疲れ切った体を休めるために瞼を閉じた。

「兄ちゃん、これ以上先は無理だ。自分の足で行っておくんな」

しばらく——数時間も乗り心地の悪い車に揺られ、尾てい骨に痛みが出始めた頃——すると運転手はブレーキをかけ、目の前に広がる雪原を指差して言った。

「ああ、わかったよ。ありがとう、代金だ」

空港で外貨両替をしたクローネ通貨を支払うと二人は下車した。

「魔術師なのだから暗示でもなんでもかければよかろうに」

「俺は嘘偽りは嫌いな」

「未熟者め……」

マスターへの不満を漏らしながらUターンして戻っていく車に目掛けて、宝具でも撃ってやろうか、と呟いたアシンの言葉を聞こえないふりをして彼は雪原へと足を踏み入れた。

と、同時に結界内に入ったんだと認識する。ああ、そうか、ここが

インランドエリア。ここいら一体に空間遮断、及び一般人——魔術に通じていない者を指す——に対し認識不可の魔術でもかけているのだろう。

それと同時にグリーンランドではあり得ない光景を目にする。

「アサシン、霊体化だ。ここはすでに結界内。戦場も同然だ」

「知っておると思うがお主が奇妙な召喚をしたせいでアサシンの固有スキルである妾の気配遮断はD。あまり期待するでないぞ」

そう、通常の聖杯戦争であればアサシンというクラスだけでイスラム教の伝承に残る「暗殺教団」の歴代19名の教主、ハサン・ザツバーハが呼ばれることになっている。

しかし、彼はアサシンの死後、流れ着いた片方の靴を入手し、それだけでなく、彼女が食したライチの実の皮、そして愛用したとされる琵琶を用意した。

そして溶解した宝石に自らの血液を混ぜ、それを使い魔法陣を描き呼び出されたアサシンクラスのサーヴァント、それが彼女なのだ。

「元々、俺はあなたの召喚を狙っていたんだ。問題はない。エーデルフェルト家には負けるが俺も宝石魔術を扱う。多少なりともサポーターはできるはず……だと思う」

マスターのその言葉にアサシンは驚き、その顔を見せまいと艶やかに顔を隠した。

——此奴は今、なんと言った……? いいや、聞こえた。妾を召喚したかった、と。そう言いおった。——

アサシンが持つ美貌……ただそれだけで王に気に入られ、戦争を起こし、そして自らの破滅を導いた。そのような女を召喚したかった、と彼は言ったのだ。

「期待しておるぞ、マスター?」

アサシンは嬌艶きょうえんに微笑みそう言うのと霊体化し、その場から姿を消した。

「全く……あの女は……」

彼は後頭部を搔きながら頬を赤らめた。

act 1

## 1. インランドエリア

氷と雪のみに包まれた大地が広がるグリーンランド内陸部。そこへ突如として結界が張られありえない街が構成された。現地の間人がそんなものに気づくはずもなく、そこはまるで日本の古都のような街並みへと変化させた。

もちろん、そんな街に人つ子ひとりおらず無人の京都、そんな異様な光景がインランドエリアには広がっていた。

そんな場所に二人の自転車を漕ぐ姿が見受けられた。

「結界内に入りましたね。ここが戦闘となる地です」

見たこともなく、グリーンランドではありえない街並みを目に口をあぐり開け、少年は動揺を隠せずにいた。

「なんなんだ？ここは？」

分かっている。知っている。そのはずなのにその言葉が出てくるほどにこの地は異様だったのだ。

「私たちは聖杯より、この時代の知識、情報を与えられます。

この地はおかしい。聖杯からの情報ではこちら一帯は雪と氷に包まれた雪原のほず。しかし、この風景は日本の西部に位置する京都そのものです」

「キョウト……。聞いたことがある。ニホンの観光地の一つで、その昔、首都だったシティだ」

「マスター、とくにかく今は教会に向かいましょう。詳しい事情はそこで」

そういうとセイバーは自転車を再び漕ぎ、どこにあるかもわからない教会を目指した。

しかし、行けども行けどもそこらにあるのは神社仏閣のみ。教会なんていう西洋の建物は見つからない。

それはそうである。ここは京都——正確にはグリーンランドであり、その面影は耐え難いほどの極寒と氷雪で出来た道のみ——なのだ

から。

「セイバー、一度休憩しよう。このまま無駄に進むよりも休んで、魔力も回復させた方がいい。」

お前を召喚した時に使った魔力がまだ存分に回復していないしな」  
目についた家の前に自転車を止めさせた。初めて目にする日本家屋に彼は呆れ返った。

「ニッポンジンってこんな寂れたところに住んでんだ。」

いや、僕じゃ考えられないな。まさかと思うけど、電気やガスはない……なんてことないよね？」

何度もいうがここは日本ではない。グリーンランドのど真ん中。ただの雪原である。当然のことながらガスも電気も通っていない。

「おいおい……。ありえないな、ニッポンジンは」

彼はポケットからボールペンを取り出すとガスコンロを模したなんでもない場所に描く。彼が持つボールペン型の魔術礼装ボウツと火がつく。

ルーン魔術、魔術系統の一つで呪文の詠唱をする必要がなくルーン文字を刻むことで発現させる魔術。時計塔では廃れた魔術だったが、20世紀にどこぞの学生魔術師が復刻させた。噂ではその魔術師は今では封印指定されているらしい。

彼が使用したのは、カノ。着火のルーンである。

(ほう、ルーン魔術……)

「ははは……僕にはこれぐらいしか出来ないんだよ、どうせ」

(そうでしょうか)

「なにが言いたい？」

彼は霊体化して姿が見えないセイバーを睨みつけた。

(そう睨みつけないでいただけませんか。私はあなたを揶揄したわけではありません。ただ……いえ、まだ話すには早いでしょう)

「なんだよ、僕はお前のマスターなんだぞ」

(時がくればお話しますよ、それより今は外の様子に気をつけた方が)  
「外……？」

彼は家の窓から外の様子を見渡す。彼の目に映ったのは、甲冑に身

を包んだ大男と女性の姿だった。

そして、二人と対峙している姿が見えないが膨大な魔力を纏った何か。

「あれは……サーヴァント……？」

「でしような。二陣営とも我らには気づいていない様子、ここから存分に見学させていただきましようか」

## 2. 聖杯戦争

——数時間前。

日本からこちらに来て、この異常な光景は割とすぐに受け入れることができた。魔術の世界でなら妥当だ、そう自分の中で処理することができたのだ。一般人に見られることもなく、聖杯戦争などという儀式をするならば、これぐらいする必要はある。今ではSNSを含めインターネットが小学生にまで普及した世の中だ。大掛かりな儀式をしようものならすぐに拡散されてしまっただろう。

『ハッシュタグ#拡散希望 人と人がありえない動きしながら争っている!!』それにサーヴァント同士の対決の写真を添付され世界中に拡散されてしまう。

普通の学校に通い、普通の生活をしている自分も魔術師の世界というもの染まってしまったているんだろいうなという自覚はある。

普通の生活をしていけば、何もなかった雪原に一步、足を踏み入れただけで京都が広がっていれば混乱するだろうし、パニックに陥るだろう。

それこそ手持ちのスマホで、グリーンランドに京都出現 写真を添付してSNSで拡散なんてこともしてしまうだろう。

私たち魔術師は優秀であればあるほど、計算や通信など携帯で出来る程度の処理は魔術回路で行える。しかし、今やこれはそれだけじゃない。携帯電話以上のことが行える。だから私は持つことにしたのだ、この直方体の電子機器を。

私が簡易工房として利用した坂本龍馬寓居跡を出て、八坂神社まで向かっている途中にそいつとは出会った。

そいつは一般人が存在しないこの京都で、この町には似つかわしくない風貌をしていた。漂う異臭——浮浪者と同じ悪臭と腐った川へのドロドロが混じり合ったような匂いを放っていた——脂が乗り粘つくドロドロとし伸び茂ったよもぎのような髪。その姿はまるでそう、さながら“ホームレス”のようだった。

そいつは地べたに座り、焦点の合っていない目でゆらりと私たちを



見ていた。私もそいつを見ていたが焦点が合わない。ただただ、気持ち悪い。

マスター「主、気をつけろ。こいつはサーヴァントだ」  
「え？」

霊体化させていたランサーはその言葉と同時に実体化し、私に注意を促した。ランサーの言葉に思わず私はそいつを睨み、身構える。

しかし、そのホームレスのような容姿のサーヴァントは何をすることもなく、私たちを焦点の合っていない目でじっと見つめていた。奇異な様子に私は手出しができず、ランサーにその場待機を命じる。

が、その静寂は突如としてランサーの懐に現れた青年と呼ぶには幼く、少年と呼ぶには大人びた男——それを青少年と呼ぶにはいささか違う気がした——によって壊される。

「弥ッ！」

掛け声とともにランサーに一撃放った。ランサーはそれを槍で受け止める。当たり前だ。たかだか人の拳などサーヴァントには効か

——が、そのたかが人間の拳まじゆつしと英霊サーヴァントの持つ槍がぶつかりあっただけでは出ない、爆音と衝撃波が辺りにこだまする。

彼は間髪入れずに続けて二打、三打と続けて打つがランサーはそれを全て防ぐ。彼は構えたまま二歩三歩下がると

「驚いた。我の拳ボクを防ぐとは。」

彼は全く驚いた様子を見せず、真顔で言った。その姿はさながらホームクルスを思わせるようだった。サーヴァント反応はない。多少の魔力反応があるだけだ。でも、なんなんだ。このランサーと張り合う異様な、異常な、逸脱した強さは。

「AAAArrrrrrraaaaaa!!!」

ホームレスのサーヴァントが痺れを切らしたのか、突然叫び出した。

「嗚呼。分かったよ、バーサーカー。☒あなたのサーヴァント強いネ」

彼はランサーに背を向けてホームレスのサーヴァント——バーサーカーの元へ歩む。

私は思わず叫ぶ。

「ま、待ちなさいよ!!な、なによ今の・・・」

私の方を振り返り、呆れたようにため息を吐くと

「バーサーカー、扱うには魔力消費多い。其、非効率。ならば、我出た方が効率良い……。」

此、最後也」

そして彼は自然に歩むように一歩踏み出し、一瞬にしてランサーの目の前に現れる。

「猛 虎 硬 爬 山」

そう眩くと右拳による中段突き。それを防がれるとさらに踏み込み、再び右拳で中段突きを繰り返す。

「うぐう!!」

ランサーは二撃目を受け流す。しかし、その振動だろうか、ランサーが一瞬苦しそうな声を漏らす。

私にはわからない。わからないけれど、一つわかることがある。それは外傷のないランサーがダメージを受けていることだ。

「たかだかマスター……魔術師の分際でサーヴァントにダメージ……？」

「我、<sup>ゴク</sup>強き者の後継者也。英霊なぞに負ける拳無」

そういうと彼はバーサーカーを連れて去っていった。私……私たちには追う気力、意志、意力すら起きなかった。

バーサーカーのマスターの強さはそういうモノだった。

私は彼がそのまま去ったことに安堵した。してしまった。

「安堵しているところ悪いが、まだ一つサーヴァントの反応があるぞ、<sup>マスター</sup>主」

「わかっているわ。その日本家屋に反応がある」

私はそこに潜むマスターに気付かれぬように気を張る。サーヴァント反応が丸わかりな辺りアシンンではないだろう。直接見ればステータスマでわかるのだろうけれど、ここからじゃ確認は不可能だ。

「どうする、<sup>マスター</sup>主」

「彼らから殺気は感じ取れない。あなたダメージは？」

「たかだか魔術師の、それも童の拳なぞ我が肉体にはなんの損害もないわ」

「オーケー、いくわよ」

「応とも！」

ランサーは家屋に向かって踏み込んだ。

## 2-2. 聖杯戦争

反応がした。が、遅い。激しい爆発音と共に二人が覗く窓を破壊する。

「うわあああああ!!」

少年の情けない叫び声が聞こえる。サーヴァントは少年を小脇に抱え、ランサーの槍を剣で受け流す。

サーヴァントのステータスを確認する。そして剣を扱うサーヴァントといえば最優のクラス、セイバーだろう。

片手で大剣を扱い、6 m以上あるランサーの長槍と存分にやり合っている。

「せせせせせせ、セイバー!!!撤退!撤退しよう」

どうやらセイバーのマスターは相当の弱腰らしい。であるならば、チャンスだ。

「ランサー、そのまま押し通しなさい」

「応!はあああああ……!!!」

ランサーは声を張り上げ、長槍を思い切り振り勢いをつけてセイバー目掛けて薙ぎ払う。

セイバーは少年を投げ飛ばし、それを全身で受け止める。

「ぐふッ……!」

セイバーはうめき声をあげ、倒れそうになるのを大剣で支えた。

「撤退だつて。撤退しろよ、セイバー」

泣きそうな声で少年はセイバーに懇願する。

セイバーはここで退くことはできない、とでも言わんばかりの眼差しでランサーと対峙する。

いいだろう。私としてもここで一人脱落させるのもやぶさかではない。

「ランサー、宝具の使用を許可する。ケリをつけなさい」

「御意!!」

しかし、銃声と共にセイバーのマスターの足元に着弾したことによって、それは防がれた。魔術師であろう者が銃を使うとは思えなかつ

た。まあ魔術使いであるならば、別ではあるが。

可能性があるならば、アーチャーのサーヴァント。近代兵器を使うアーチャーならばいてもおかしくはないだろう。

一発目は脅しか、それとも自分も見ているのだぞというアピールか。続いて発射された二発目の銃弾にその回答はされる。

それは確実にセイバーのマスターの頭を狙ったものだった。もちろん、セイバーはそれを防ぎ

「出てきなさい！我がマスターを遠距離から狙おうとは腰抜けにもほどがある！」

思い切り左手でマスターの頭を押さえつけ、自らは剣を構えて周りを見渡す。その声にも誰も反応を示さず、静寂が訪れる。

そこで姿を見せぬまま、セイバーのマスターに向かって正体不明の声は発した。

「私から聖遺物を盗み出し、聖杯戦争に参加している気分はどうだ？」

魔術による遠隔地からの対話。優秀な魔術師であればあるほど、携帯電話を所持しない。

『そういったものに頼るのは実力のない未熟な魔術師であると公言しているのよなもの』だと軽んじているからだ。

しかし、ある魔術師の言うところなれば『外付けの端末で用が足りるのなら、その分の回路を違う用途に回せる。今まであった機能を捨てる代わりに新しい能力<sup>じかん</sup>を獲得する。未来にリソースを残すとはこういうこと』たしかどこかの人形師の言葉だったか。

「と、父さん……」

「やはりお前如きでも最優と呼ばれたセイバークラスならば扱いに困らないのだな」

「今の襲撃はあなたの仕業ですか。我がマスターの父君」

セイバーのマスターの父親はくつくつと笑うと

「左様よ。セイバー。私のアーチャーの銃弾を防ぐとはさすがよな」

ひどく低い、でもよく通る声だった。

「やはりあれは近代兵器……。アーチャーの攻撃でしたか。しかしながら、そのような遠距離から自らの息子を狙うは許しがたい行為であ

ります」

「初めからそいつには何一つ、期待なぞしておらんわ。そうさなあ……そいつの妹の方が魔術師としては優秀なのだからな」

その言葉に少年は肩を震わせ、瞳に涙を浮かべ唇を噛み締めていた。彼が言ったことは事実なのだろう。事実だからこそ、少年も悔しいのだろう。

「聞こえておるか？アーチャーのマスター」

セイバーと我、ランサーとの戦いに手を出すとは言語道断！お主らがセイバーに手を出すというのであれば、我はセイバーに手を貸すとするが？」

「……！」

突然のことで絶句する。開いた口が塞がらないとはこの事だと実感する。ありえない。信じられない。考えられない。どうしてあなたが口を挟むというの……！

ランサーを止めようとセイバーたちの元へ私は不用意に近づいてしまう。

「やはり対峙していたは、サーヴァントであったか。

……よいだろう。ランサー、そしてそのマスターよ。お前たちの実力が確かならば、ここでセイバーを討つがいい。私たちはその戦いには手を出さない。約束しよう」

「相、分かった！」

アーチャーのマスターの言葉にランサーは応え、戦闘を続行しようとして長槍を構えた。

「待ちなさい！」

好き勝手しようとするランサーを止める。

「何故止める？マスター」

「セイバーとの戦闘中に手を出される可能性だってあるし、仮に戦闘に手を出さなかったとしても戦闘後に私たちが討たれることだってあるわ。

残念ですが、ここは私たちは退かせて頂きます。

セイバーのマスターの頭を撃ち抜くことのできたアーチャーの目

ならば私を討つことだって可能でしょう。その時は決死の覚悟でその引き金を引かせなさい！」

彼の父親はまた、くつくつと笑い

「良いだろう。小娘と思つて侮つていたが、なんとも面白き娘ではないか。私がもう少し若ければ、側室にでも貫つてやっても良かったかな、美作の次期当主よ」

男のふざけた言葉は、最後に言った言葉で打ち消された。どこで私が美作の人間だと言った……？

「どうした？随分と困惑しておるようだが、お主も知つておろう？私は『ジャレット・ブルーム』である」

では、彼が、この男が、こいつが、二十歳にして祭位<sup>フェス</sup>就任、そしてつい先日色位<sup>ブランド</sup>に昇格したブルーム家1代目現当主ジャレット・ブルームだというのか。ということはセイバーのマスターであるこの少年は彼の嫡男であるジェレミー・ブルーム。

私は動揺を隠しながら言った。

「お言葉ですがブルーム卿、私はあくまでも当主候補。まだ決定したわけではありませんので……」

「くつくつくつ。遠慮か謙遜か、はたまた己の自信のなさか……」

なんにせよ、お主の実力は時計塔の連中も認めておろうに」

そんなこと言われても私はそんな器でもなければ、実力も伴っていない。一体、どこの誰が吹聴したかは知らないが、やめていただきたいものだ。

「……るな。……るなよ」

「ほう？何かほざいたか？出来損ない」

自らの息子をこう呼ぶジャレットは本当に魔術師<sup>マジシャン</sup>なのだろう。魔術師として生まれ、育ち、今まで生きてきたんだ。そして、そのように子供達にも教育してきたんだらう。

「……するんじゃない。……しるな。僕を無視するな！僕はあな<sup>お父さん</sup>たを超える。そして認めさせてやる！僕が……僕こそが次期当主だと……！これはそのための聖杯戦争だ!!」

ああ、彼は父親に認めてもらいたいのだろう。なるほどな、その気

持ちは分からなくもないが、私は認められなくなかった側の人間だからな。簡単にその気持ちに同意してはいけない、そう思った。

それにブルーム家は今でも根源を目指し求めている家系として有名だ。

魔術なんてものは神代から現代まで衰え続けているものでしかないのだから、現代の魔術師のほとんどが根元を目指しつつも、根元に至れぬと理解している。その中でもこのブルーム家は今でも根源に辿り着くことを目指し続けている家系なのだ。

父は根源を求め、子は父を超えることを求める。その時点で実力とはかく、結果はだいたい見えている。目指す場所が違うのだ。それも大きすぎるほどの差がある場所。それに気づかぬ限り——彼に本当に実力があり、父がそれに気づかなかった場合を除き——ジェレミーの負けは目に見えている。

ブルーム卿もそれがわかっていたからだろう、再びくつくつ笑い「ほう、言ったな。言いよったな。その言葉忘れるでないぞ。楽しみにしておるぞ……失敗作？」

そう言っつて声の主の気配は消えた。

「お姉さん、僕は超える。父を超える。だから……あなたにはここは見逃してほしい……。お願いします」

頭を垂れる少年の肩は震えていた。ああ、悔しかったろう。悲しかったろう。辛かったろう。私も今の流れから戦闘をする気は起きない。その辺り、私は甘い魔術師なんだろうな。

「ええ。もちろん、いいわよ。あなたが父を超えることができた時、また逢いましょう？」

その言葉は本心だった。彼には超えることが難しいとわかっていた、わかっていたけれど、私は期待せずにはいられなかった。

見てみたい。そう思った。そう思ってしまった。

息子が父を超えた姿を。少年が超えることができた時。彼は何を知り何を思い何を得るのか。その答えが知りたいと思った。



### 3. 同盟

遠くの方で銃声が聞こえた。妾のマスターも反応したが、日本で感染した眼内炎——めばちこといったか——が急に痛みを発したせいとその場にとどまることになった。

「これ、マスター。そのように目を抑えると悪化するぞ」

「ああ、わかっている。でも、痛つ……」

やれやれ……。妾のマスターは、なんともまあ情けない男じゃな。

さて、妾たちは拠点しとておった場所——宝蔵寺から何気なく八坂神社へと向かおうとしておった時に銃声が鳴り響いた。マスターのめばちこの悪化共に引き返すことになったのは言うまでもない。

「銃声で悪化したわけではあるよな？」

「はは、まさか。そんな、いや、多分……ないだろう……？」

歯切れが悪そうにマスターはつぶやいた。

この男、何を隠しておる。まあ妾にはマスターが何を隠しているようがいまいが関係はあるまい。

今はそれよりも、だ。妾のマスターを付け狙う者どもを排除せねばならぬ。

「そのの者、出て参れ。アサシンでもない者がコソコソするでない」  
妾たちがこの寺を出て行ったと同時に来たのであろう。そうでなければ、妾が気づかぬわけがない。

「ほうーこのワシらに気づくか！見事よ！実に見事！」

「あ！ちよ、ちよつと！勝手に出ていかないでよ！全く、こいつは……」

年老いた大男、そして気強そうな娘の二人組。

「アサシン、気をつけろ。あの二人組、全く正体がわからない」

「わからないとはなんじゃ？」

「わかるだろう？二人のどちらからもサーヴァント反応がないんだよ」

左様か、左様か。で、あるならば聞くまでよ。

「お主ら、何者じゃ」

大男はカツカツカツと笑うと

「何者、か。ワシは——」

「あーっ！あーっ！あーっ！あーっ！！」

ななななな、なに言い出してんの!? あんたは!!」

妾の問いに答えようとした大男の言葉を娘が遮る。なんじゃ、面白みのない。

慌てた様子を見せた娘は「オホン」と咳払いをすると真剣な顔つきに戻すと

「そうよ、アタシたちはこの聖杯戦争の関係者よ。こいつは言おうとしてみたんだけど、詳しいことは言えないわ。

それで? アサシンクラスの楊貴妃様とそのマスターはアタシたちと争う? それとも協力する?」

妾はマスターと目を合わせる。なんじゃと——?。この娘、何故妾の真名に気づいた——。

「驚いているようだけど、あなたたちだけじゃないわよ。この戦争に参加している全てのサーヴァントの真名は私には分かるのよ」

「おい、娘。お主の方こそ口が軽くはないか?」

「いいのよ!! アサシンたちがアタシたちに協力しないというならここで潰すのみ。だったらアタシたちに有利な状況は変わらない。でしよう?」

二人が言い合っている内に妾たちは結論を急いだ。

「いいんだな? アサシン」

「妾の真名が明かされた今、協力しない手はないだろう。どちらにせよ、一生隠し通せるものでもないわ。それに他のサーヴァントの真名もわかれば、妾たちにも有利であろう?」

マスターは頷くと

「よし、あんたたちに協力しよう」

「ふーん、わかったわ。あなたたちの賢明な判断に敬意を表するわ。

なんなら自己強制証明を結んでも構わないわよ?」

「ハハッ。そこまでしてしまおうとアサシンの我々があんたたちを暗殺できなくなってしまう。それはご遠慮頂こう……。」

なんて、強制ギアスの呪いなんて回避しようと思えばいくらでも回避することはできるみたいだしな。俺たちでは考えつかない方法でな」

「そう……わかったわ」

結論ついたようじゃな。さてと。妾はわざとらしい咳払いをし、その場の空気を一度整え

「お主たち、何者じゃ？妾たちと協力関係にあるならば、その正体を明かしてもらわねばな」

此奴らに邪魔されぬようマスターの前に立ち、二人に問う。

「カッカッカッ!!聞いて戦おののけ!!見て驚愕せよ!!ワシの名は——!」

「黙りなさい。アサシン、残念だけれどそれは言えない。私に言えるのは私はマスターでこいつは正規のサーヴァントではないということよ。聡明なあなたならば分かるでしょう?」

「ふむ、承知した。妾はこれ以上、お主たちに問うことはせぬ。マスターはどうじゃ?」

「ああ、大丈夫だ。俺は西門類。よろしく」

「アタシはギネヴィア。セレナ家第5代当主ギネヴィア・セレナよ」

## 4. 開戦

「マスター、よろしいのですか?」

「なにがだ?アーチャー」

狙撃銃を携えた若い女の問いかけに初老の男、ジャレット・ブルームは睨みつけた。その様子に怯むことなく、女は答えた。

「御息のことです」

「よい。それよりも、だ。あの娘、なかなか面白いではないか」

出来損ないの息子のことなど眼中になく、彼の目下の標的は美作の次期当主だった。

美作琴音の父である美作家・現当主、美作泰造たいぞうとは時計塔で学生だった頃に個々の能力を競い合ったものだった。しかし、それも遠い昔のこと。ここ十数年間で彼の噂を聞いたことはただの一度もなかった。

それよりも彼の娘の名が広まるばかりだった。噂されるは、彼女の圧倒される数と非常に細かく美しい魔術回路、希少属性——ノウブルと称される——風。さらに魔眼さえ持つとまで言われている。時計塔でも彼女の話題で持ちきりだった。あの美作泰造の娘が非常に優れた魔術師だ、と。それと比例するかのようには泰造は時計塔からも姿を消した。そして、彼自身の話題はぴたりと止まった。止まってしまった。

そんな時だった。彼が冬木の聖杯戦争に参加する噂を聞いたのは。第五次聖杯戦争よりもそれほど時間が経たずしての開催——冬木の聖杯戦争はおおよそ60年周期で行われていた——。その噂を聞き、すぐさまジャレットも準備に取り掛かったが、準備が完了した頃には現代魔術科マジックの君主ロード、ロード・エルメロイⅡ世によって聖杯が解体されていた。

泰造と再び相見えるチャンスを目前で取り消されたジャレットは現代魔術科のエルメロイを強く憎んだ。だがすぐにそんなことはどうでもよかった。根源へ至る方法が彼の手元に届いたからだだった。

数ヶ月前、ジャレット・ブルームの元に聖杯戦争開催を報せる手紙

が届いた。手紙の内容は聖杯戦争の場所と日時。そして、彼のサーヴァントとなる英霊の聖遺物が同封されていた。不審に思いながらも、まさか自分が、自らの手で、一族の悲願である根元に至ることが出来るのであれば泰造との対決など、どうでもよかった。どうでもよくなった。

しかし、そこで思わぬ邪魔が入った。彼の工房に何者かが侵入し、聖遺物が盗まれたのだ。彼も色位に授けられた魔術師である。そんな彼の魔術工房に形跡もなく侵入できる人物は、息子のジエレミー以外考えられなかった。急ぎ彼は時計塔のコネを使い、今のサーヴァントであるアーチャーの聖遺物を手に入れ召喚し、姿を消した息子と彼の使い魔<sup>サーヴァント</sup>を追った。

インランドエリアに着くと彼はアーチャーの持つクラススキル、千里眼を活かすために、自らの地脈としても相性のいい山頂に工房を作った。そこから京都——名目上こう表記する——を一望した。

彼にとって好都合だったのは、息子のサーヴァント<sup>セイバ</sup>の真名がわかることだった。そう、ジャレットの元に届いた聖遺物は13世紀末、スコットランドの英雄が着用していた鎧の一部だった。

スコットランドの英雄『ウィリアム・ウォレス』イングランドからのスコットランド支配に対して、抵抗をし続けたスコットランドの愛国者であり騎士。

彼の一生は実に壮絶なものであった。

一時期はスターリング・ブリッジの戦いにて戦果を上げ、「スコットランド守護官」に任命され「サー・ウィリアム・ウォレス」と呼ばれるようになる。

しかし、彼の栄光も長くは続かなかった。貴族階級からの軽蔑や味方からの援護もなく、フォルカークの戦いの大敗によりその職を辞することになる。

その後も彼は懸命にイングランドに抵抗を続けたが、かつての部下や仲間たちに裏切られ、捕縛されてしまう。彼はイングランド国王に対する重大な背信行為、大反罪で罪を問われたが「私はイングランド

王に忠誠を誓ったことはなく、彼の臣民ではないので大逆罪など犯していない」と裁判で主張した。

しかし有罪になり、ウオレスの処刑は決まった。それは残虐なものであった。処刑地までの8キロの道を引きづられる。引きづられながら石などを投げられる。処刑地では首吊り、内臓抉り、四つ裂きという形で処刑される。挙句、ウオレスの首はロンドン橋で串刺しとなり、4つに引き裂かれた胴体はイングランドとスコットランドの4箇所ですべて晒し物にされた。

彼の死をもってイングランドはスコットランドの抵抗を恐怖で鎮圧させるつもりであったが、逆にスコットランド国民を立ち上げさせ、イングランドから支配を崩壊させた。

ウイリアム・ウオレスは英雄として死んだのではなく、死んでから人々を鼓舞させた英雄となったのだ。

真名とは召喚された者の本名、いわば正体。これは秘匿されなければならず、相手に正体が知られる。すなわちそれは、英霊の残した伝説・伝承が知られるということであり、弱点につながる情報をさらすことにもなってしまうのである。

ジャレットはセイバーの正体に気づくと、くつくつと笑い

「行くぞ、アーチャー。これからが本当の開戦だ」

そう呟き下山を始めた。アーチャーはこくりと頷くと霊体化して姿を消した。▪

## 番外編・StatuS

Class : セイバー

マスター : ジェレミー・ブルーム

真名 : ウィリアム・ウォレス

詳細 : スコットランドの愛国者であり、騎士。イングランド王エドワード1世からのスコットランド支配に対して、抵抗運動を行なった。活動を継続したが、残虐刑で処刑された。しかし彼の死によりスコットランド国民は激励され、イングランドのスコットランド支配を崩壊させた。

性別 : 男

身長・体重 : 210cm・92kg

出典 : 史実

地域 : 欧州

属性 : 秩序・善

パラメーター : 筋力 A 耐久 B+ 敏捷 C 魔力 C 幸運

C 宝具 B

クラススキル : 対魔力 C 騎乗 B

保有スキル : カリスマ C | 軍略 C

Class : アーチャー

マスター : ジヤレット・ブルーム

真名 :

詳細 :

性別 : 女

身長・体重 : 156cm・58kg

出典 :

地域 :

属性 : 秩序・中庸

パラメーター : 筋力 C 耐久 C 敏捷 C 魔力 E 幸運

B 宝具 C

クラススキル：単独行動 B 対魔力 E  
保有スキル：心眼（真） C 射撃 C 千里眼 D 狙撃 A

Class：ランサー

マスター：美作琴音

真名：

詳細：

性別：男

身長・体重：185cm・82kg

出典：

地域：

属性：混沌・善

パラメーター：筋力 A 耐久 D 敏捷 C 魔力 D 幸運

A+ 宝具 EX

クラススキル：対魔力 C 狂化E+

保有スキル：軍略 C 怪力 B ??? B

Class：アサシン

マスター：西門類

真名：楊貴妃

詳細：中国唐代の皇妃。姓は楊、名は玉環、楊玉環。唐を滅ぼす原因となった世界三大美女の一人で古代中国四大美人の一人でもある。音楽や舞踊に多大な才能があったと言われている。

性別：女

身長・体重：158cm・46kg

出典：史実

地域：中国

属性：混沌・中庸

パラメーター：筋力 E 耐久 D 敏捷 C 魔力 B 幸運

C 宝具 C

クラススキル：気配遮断 D 対魔力 C



保有スキル：フェロモン B 魅惑の美声 C 傾国の美女 A

Class：バーサーカー

マスター：

真名：

詳細：

性別：男

身長・体重：190cm・86kg

出典：

地域：

属性：秩序・狂

パラメーター：筋力 A 耐久 B 敏捷 C 魔力 C 幸運

B 宝具 B

クラススキル：狂化 C 騎乗 C

保有スキル：??? A カリスマ C

Class：アヴェンジャー

マスター：

真名：アムレート

詳細：シエイクスピアの悲劇『ハムレット』の主人公ハムレットのモデルになったデンマークの人物。ゲルヴェンデルの子ホルヴェンデルと、デンマーク王腕輪投げのローリクの娘ゲルータとの間に生まれた。父ホルヴェンデルの弟であり伯父のフェンギは兄の栄達を妬み、ホルヴェンデルを殺し、母ゲルータを妻にした。アムレートはすぐに復讐することはず、狂気を装った。聡明で狂気の振りをしているのではないかと疑われたが、何年もかけて、復讐を成功させた。

性別：男

身長・体重：180cm・75kg

出典：北欧神話

地域：欧州

属性：混沌・悪

パラメーター：筋力 B 耐久 B 敏捷 C 魔力 A 幸運

D 宝具 C

クラススキル：復讐者 C 忘却補正 B 自己回復 C

保有スキル：無辜の怪物 D

Class：ルーラー

マスター：ギネヴィア・セレナ

真名：ペトロ

詳細：本名シモン。初代ローマ教皇。救世主に従った使徒の一人。

性別：男

身長・体重：215cm・120kg

出典：新約聖書

地域：ローマ

属性：秩序・善

パラメーター：筋力 耐久 B 敏捷 D 魔力 C 幸運 A

+ 宝具 B

クラススキル：対魔力 EX

保有スキル：真名看破 B 神明裁決 B カリスマ A 聖王

A